

エッセイ

ホンモノ主義

浦野裕司

井の頭公園の冬芽観察

「井の頭かんさつ会」という民間団体が月に一度行っている観察会に、何度か参加したことがある。日曜日の午前中、観察会のメンバーの詳しい説明を聞きながら井の頭公園内を歩いて、植物や生き物の神秘に触れることができる。今年の二月に参加した折のテーマは「春を待つ木々の冬芽」。たくさんの冬芽に出会った。アジサイの冬芽は冠を被った王子様のように。ドウダンツツジは、白い髭に赤い帽子を被ったサンタクロース。ニセアカシアの冬芽をルーペで見れば、そこには悪魔のような顔が現れる。次から次へと教えられる冬芽の姿の面白さに、時が過ぎるのを忘れた。

かんさつ会の方の説明の中には「芽輪痕」、「維管束痕」などという耳慣れない言葉も出てくるが、専門用語を介さなくても十分に楽しめた。いろいろな樹木の冬芽を自分の目で確かめてみると、多種多様で実に興味深いのだ。その折に撮ったのがこの写真。今か今かと春を待つ、トキノキの冬芽である。

かわいい埴輪が「こつちにおいで」と言っているかのような姿。かつてNHKで放映された「おーい！はに丸」という番組の主人公を思い出した。自然が作り出す造形はなんと不思議で、なんと面白いものなのだろうと筆者は思うのだが。



前を挙げたり、「柄の冬芽ですね」と即座に言葉返してくれたりするような冬芽通の人もいる。そんな中で、予想外の反応にびっくりさせられたのは、ある若者のこんなひと言だ。

「写真を加工したんですか」

「加工なんてしてないよ。写したままの画像なんだ」

そう答える私に、もう興味が無いという感じで写真から目を逸らした彼の反応に、二十五年前に担任していた一年生の教室での出来事の記憶が蘇った。

ニセモノのピーマン

さて、この写真。プリントして、いろいろな人に見せたところ、その反応の多様さに驚かされることになった。

まず、現在担任している小学六年生の子ども達。「わあ、かわいい」と笑顔になる子どももいれば、「何それ？」とそつけない表情になる子。中にはまったく興味・関心を見せずにちらりと見ただけで終わるという子も。子どもだけではなく、大人の反応も多種多様だ。多かったのは「かわいい！」と言って笑顔になる人。「これ、人形ですか」とか、単純に「何の写真？」と尋ねる人。そして「あつ、『冬芽合唱団』みたい」と、冬芽の写真を集めた書籍の名

当時私は、自宅の隣の空き地を借りて、休日菜園を楽しんでいた。わずかに四坪ほどの菜園ながら、有機肥料を中心に、無農薬でナスやキュウリ、ミニトマトなど、素人でも育てやすい野菜を栽培していた。収穫する野菜のうち、いちばんのお気に入りにはピーマンだった。肉厚で色も香りも濃く、スーパーで買うものとは別次元の味わいだった。生のままかじって「うまい」と思った野菜は、このピーマンが初めて。肉詰めに焼いてもみずみずしさを残したまま形が崩れず、口にすれば清々しい苦みと優しい甘味が口に広がった。そんな「ホンモノのピーマン」を知ってほしくて、ある日、採れたてのげんこつ大のピーマンを学校へ

持つて行って、教室で子どもたちに触らせてみた。

「うわあ、かたい」、「でっかい」、「ピーマンくさい」といった無邪気な反応は予想していた通りのもの。けれども、一人だけまったく予想外の反応をした子どもがいた。手にしたピーマンをいろいろな角度から見たり、指で押したりした後、

「なんだ、ニセモノか」

と呟いたのだ。本物のピーマン見せたさを持って行った教室で、ニセモノ呼ばわりされようとは思ってもしなかった。

これには本当に驚いた。「なんてこと言うんだ」と、怒りたいような気持になった。しかし冷静に考えてみると、子どもたちにとっては、日々目にし、口にしているスーパーのピーマンこそが「ホンモノ」なのだ。こんなに大きくて固くて青臭いピーマンなんて見たこともないのだから、ニセモノだと思うのも仕方ないことなのかもしれない。

とはいえ、見たことも無い、さわったことも無いものは、つくりもの・ニセモノだとする感覚。普段の生活で見慣れたものこそが本物であるという感覚を、仕方がないで済ます訳にはいかないと思った。

ニセモノ志向の世代

テレビでもインターネットでも、本来の映像や画像を加

工するのが当たり前の昨今。テレビやインターネット、ゲ

ーム等でCGによる作り物の映像を見せつけられると、私の場合には気分が悪くなる。そうした映像を脳が生理的に受け付けず、吐き気や頭痛ができて、無性にホンモノが見たくなる。幼いころからニセモノに触れて育った子ども達の脳は、いったいどのようなようになっていくのだろうか。

ひとつの表れだろうか、極端な虫嫌いや食べ物への好き嫌いの激しい子どもが増えているように感じる。その傾向は子どもに限定されるものではなく、無性にホンモノが現に若い教師の中には、虫にさわれない、給食のおかずで食べられないものがあるという人が少なくなってきた。

現在二十代後半から三十代の人は、二、三十年前に子ども時代を過ごしている。子ども時代の繊細な脳が、テレビゲームやパソコンのバーチャルな世界に親しみ始めた最初の世代と言える。ニセモノは大丈夫だけれど、ホンモノはちよつと…、ということになってはいないだろうか。

ホンモノの自然

かれこれ十年ほど前の夏のモンゴル。ゴビの灼熱の砂丘を歩いていて、ふと目に留まった草の芽の群落。こんな過酷な環境の中で、どうして薄緑色の柔らかな双葉が一斉に芽吹いているのだろうかと目を疑った。

自然の不思議さには、しばしば驚かされる。その驚きはとても新鮮であり、心地よいものだ。感動にはいろいろな種類があると思うが、自然から受けるそれは心の最も深い所が動かされるような気がする。感動を受ける自然は、何も雄大な景観に限ったものではない。足元の植物や、木の枝先に意外な発見をした時の感動もまた味わい深く心地よい。なぜ心地よいのか。それはバーチャルな体験、ニセモノの体験ではなく、ホンモノとのふれ合いだからなのだろう。

健康と体力の維持と季節ごとの自然を楽しむことを兼ねて、月に一度、家人と低山を歩くことを始めた。住まいのあるのは八王子。高尾山は最もアプローチしやすい低山だ。朝寝坊しても、たっぷりと歩く時間が取れる。また少し足を延ばせば、五日市や奥多摩に気軽な低山歩きのコースがたくさんあり、どこへ行っても四季折々のホンモノの自然に出会うことができる。

四月は、高尾山から城山を回り裏高尾へ降りるルートを歩いてきた。目が洗われるような新緑の山々、高尾の名の付くタカオスミレの花との出会い、カツラ林の柔らかな若葉。仕事の疲れとストレスが溜まっていたわが身が、少し軽くなったような気がした。ホンモノの自然は、心にも体にも優しい。

MT車主義

愛車のレガシーが、九年目の車検を迎えた。これまでに所有した車は、ホンダライフから始まって、スターレット(二台)、カローラ、ファミリアと経て、六代目になる。

なんとも節操の無い車選びだが、一つだけ一貫していることがある。すべてマニュアルシフト車(MT車)という点だ。

MT車の運転にはリアリティが感じられるからなのだろう。MT車の運転の楽しさは捨てがたく、MT車ひと筋の車ライフを送ってきた。そろそろ自動ブレーキシステムの着いた「ぶつからない車」もいいなあと思いはじめはいるのだが、ホンモノの運転を楽しみたければMT車に限る、という頑な考えがなかなか抜けない。

「高速の渋滞で左足が筋肉痛になるのも、リアリティのあるホンモノの運転だからだよなあ…」

そんなことをつぶやいていたら、車があまり好きではない家人に怒られた。「ホンモノの自然が大切だって思っているのなら、車なんか乗らなければいいのに」と。「AT車は怖い。MT車しか運転したくない」と言う彼女もまた、かなり頑なな人なのだ。